釈如何。答う、弘決第五に云く、「若し正観に望むれば全く未だ行を論ぜず。亦廿五法に歴て、事に約して解を生じ、方に能く正修の方便と為すに堪えたり。是の故に前の六は皆解に属す」等云云。又云く、「故に止観に正しく観法を明かすに至りて、並に三千を以て指南と為す。乃ち是れ終窮究竟の極説なり。故に序の中に、説已心中所行法門と云う。良に以有るなり。請う、尋ね読まん者、心に異縁無かれ」等云云。夫れ智者の弘法三十年。廿九年の間は玄・文等の諸義を説きて五時八教・百界千如を明かし、前五百余年の間の諸非を責め、並に天竺の論師の未だ述べざることを顕す。章安大師云く、「天竺の大論尚其の類に非ず。震旦の人師何ぞ労わしく語るに及ばん。此れ誇耀に非ず、法相の然らしむるのみ」等云云。墓無きかな、天台の末学等、花厳・真言の元祖の盗人に一念三千の重宝を盗み取られて、還りて彼等が門家と成りぬ。章安大師兼て此の事を知りて歎きて言く、「斯の言若し墜ちなば将来悲しむべし」云云。問うて曰く、百界千如と一念三千との差別如何。答えて曰く、百界千如は有情界に限り、一念三千は情・非情に亙る。不審して云く、非情に十如是亙らば、草木にも心有りて有情の如く成仏を為すべきや如何。答えて曰く、此の事難信難解なり。天台の難信難解に二有り。一には教門の難信難解、二には観門の難信難解なり。其の教門の難信難解とは、一仏の所説に於て、爾前の諸経には二乗と闡提は未来永く成仏せず、教主釈尊は始成正覚なり。法花経に来至して迹本二門に彼の二説を壊る。一仏二言水火なり。誰人か之を信ぜん。此は教門の難信難解なり。観門の難信難解とは、百界千如・一念三千にして、非情の上の色心の二法、十如是是なり。爾りと雖も木画の二像に於ては、外典・内典共に之を許して本